

本当はすきだ"た



いつの頃からか



私はいつも  
一人だった...



子供の頃は  
友達がいいた



夕いぢゃないけど...

そのうち 友達は  
いなくなつた

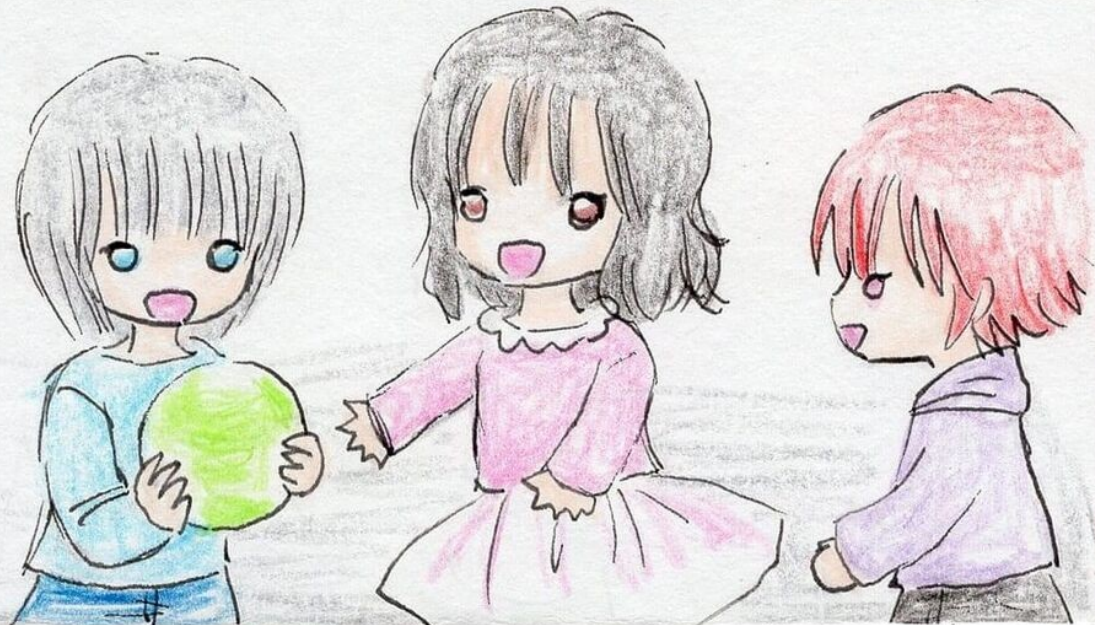


あの男の子のせいで...

私には  
ふかたなじみの  
男の子が  
2人いた



ふかいと真は  
その2人とよく  
あそんだ



私は元気で男の子みたいだった



中学でその2人と  
同じクラスになると



← おとなしく  
なった



2人は私をいじめた

そのうちみんなにいじめられるふうになり



友達はいなくなつた



悲しかった  
心  
ふかい顔は  
やさしかった  
のに



私は学校にいかなくなった  
さみしくて一人で泣いた



でも生きて  
いかなくちゃ



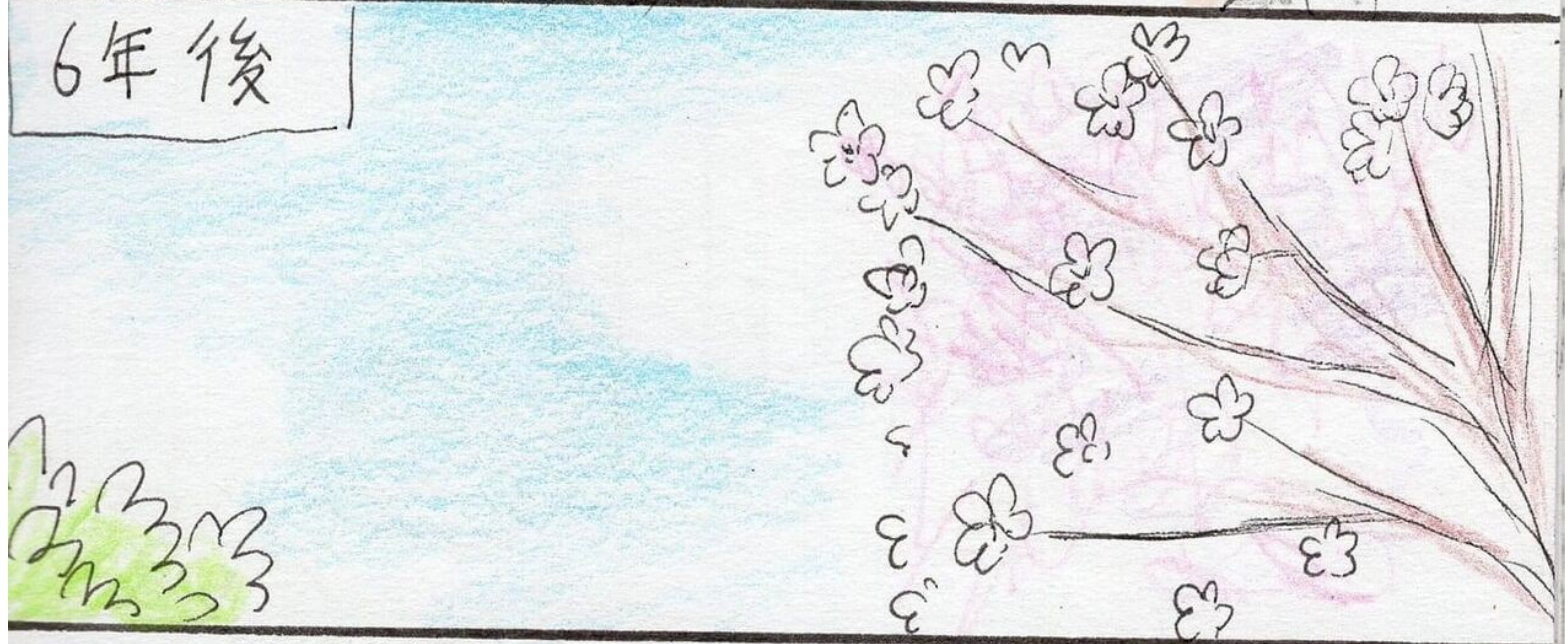
男の子が  
小布い...  
男の子が  
キレイ...



もう忘れよう....



6年後



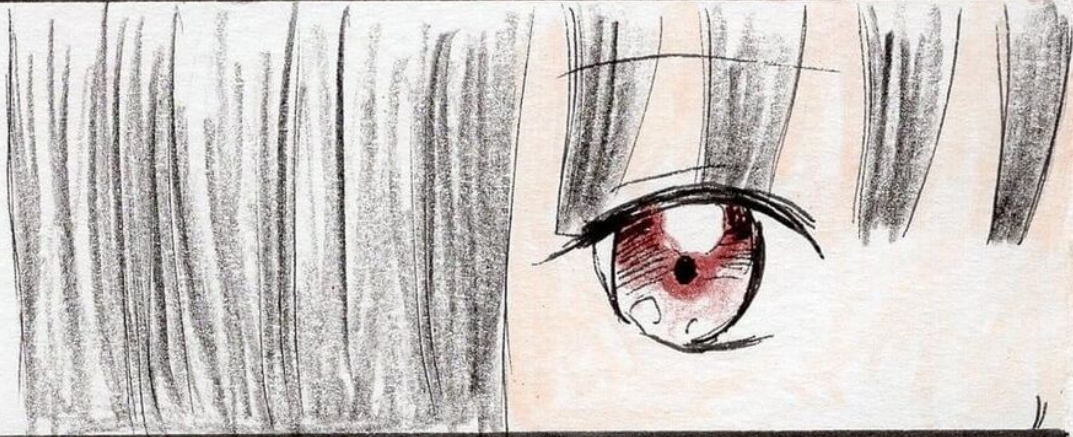
私は二十歳になった  
やりたいこともなく  
毎日あそんで  
すごしていた



ある日 両親がいなくなった 海外旅行に  
いっから 亜美のお世話はある人に頼んだからと...

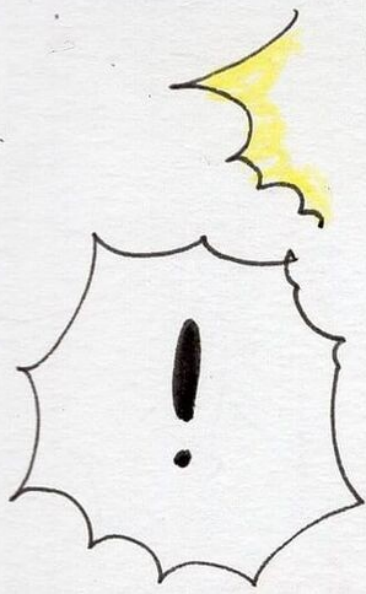


ガチャ



お父さんたち  
帰ってきたの  
かな? ○○○





大丈夫か亜美...



ひしひし

誰...?



俺たちだよとなりに  
住んでる



隼 ←

敦 →



隼(じゅん)と  
敦(あつし)だよ

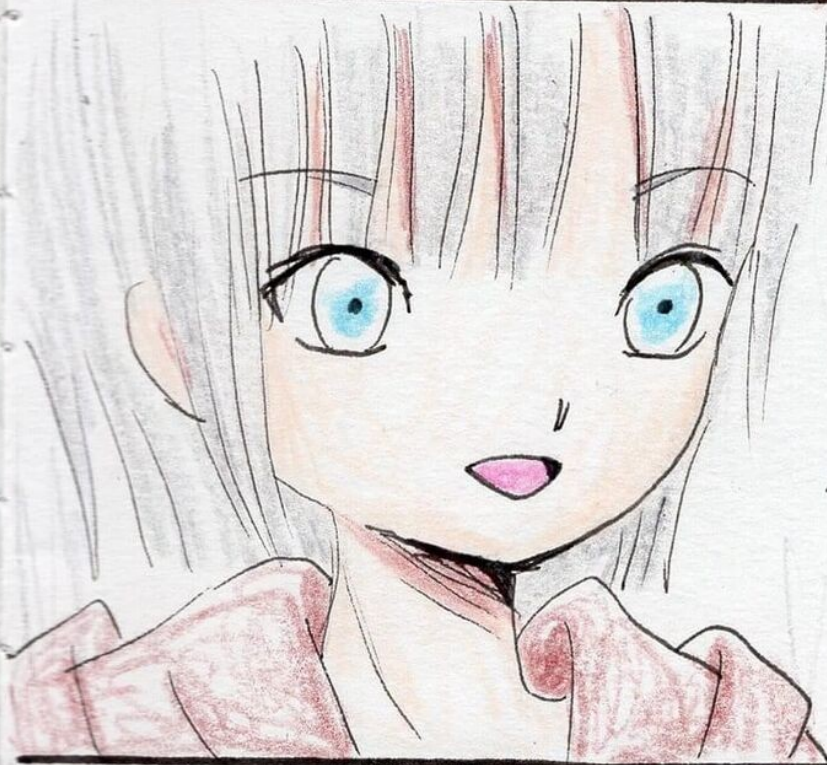
あの2人...!?



どうして鍵...  
もってるの？



亜美の親父さん  
から預かったんだ  
亜美の世話をする  
ようにと



そんな...  
嫌よ  
こんな人たちに  
たおけてもらう  
なんて...

怖い...





どうしたの  
ふるえてるよ



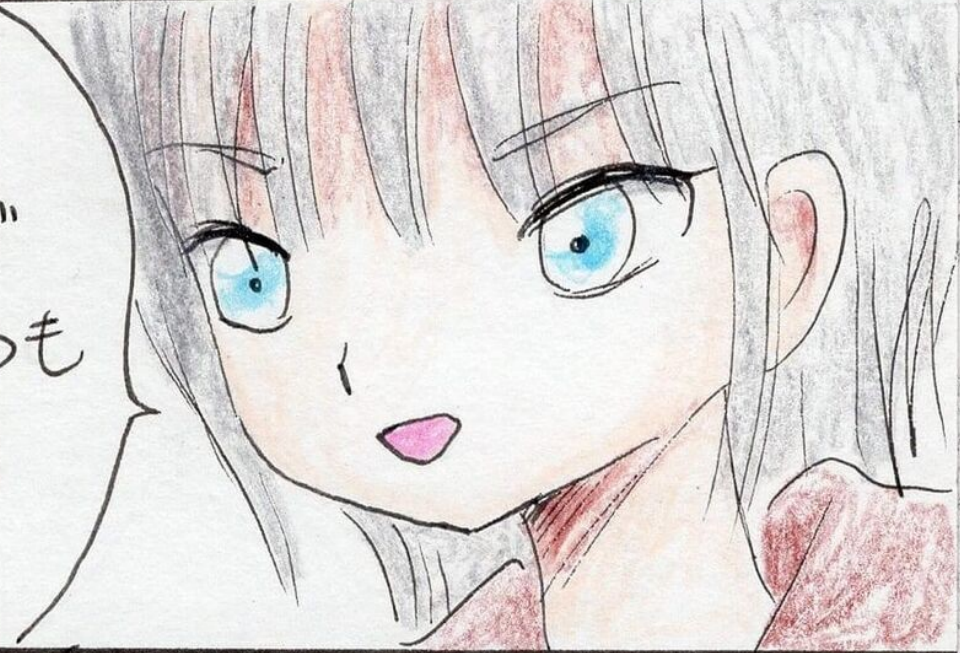
イヤ!



おちつけよ  
大丈夫だから  
部屋で休んだ  
ちがいいよ



これから  
俺たちはここで  
暮らすから いつも  
そばにいるから  
安心しろよ



あなたちなんかに  
いない方が安心するわ  
昔私をいじめた  
じゃない...



あの頃は...  
ごめん...  
かゆいかったから...



泣くほど...  
ごめん...  
好きだったんだ"  
亜美のこと...



え... 私が好き...?



嫌いだ"から いじめてるのかと 思っていた...



ごも ...



私は嫌いだよ...

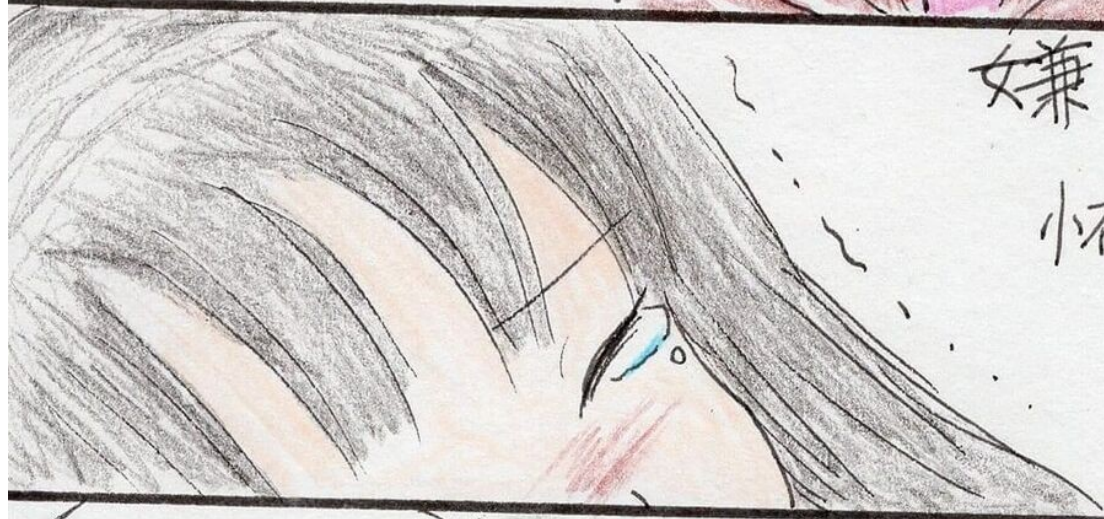
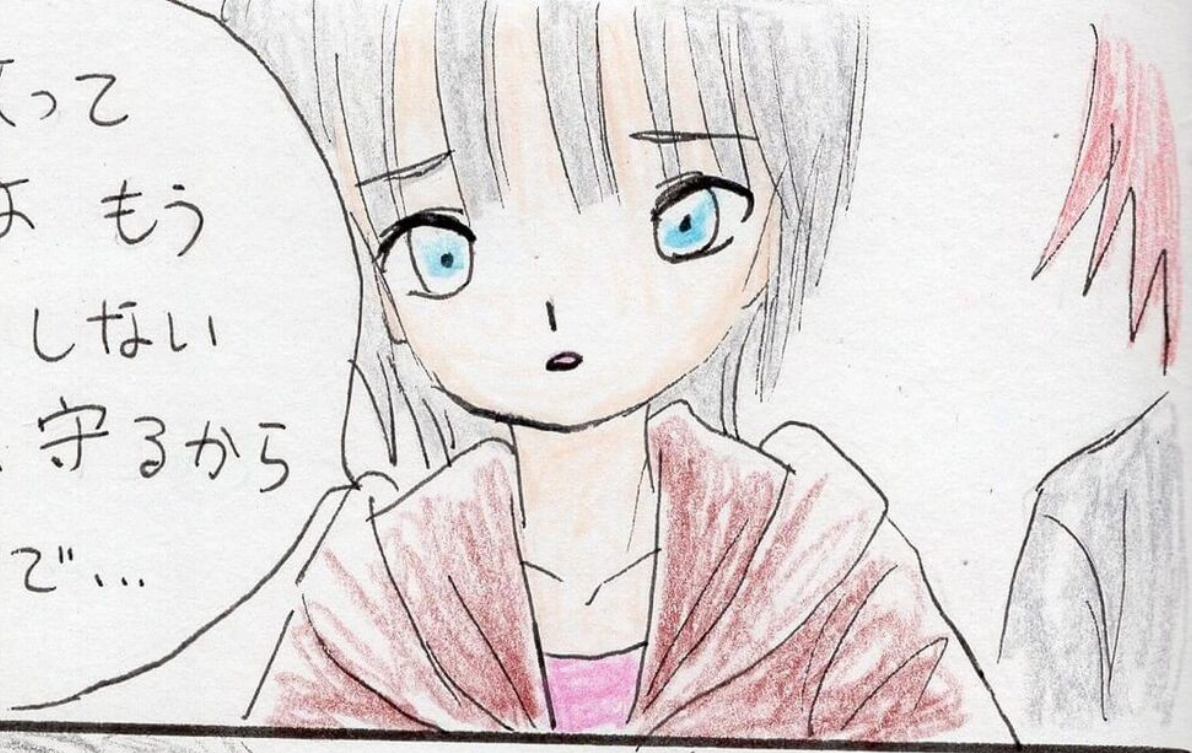
隼も敦も

嫌いだよ...

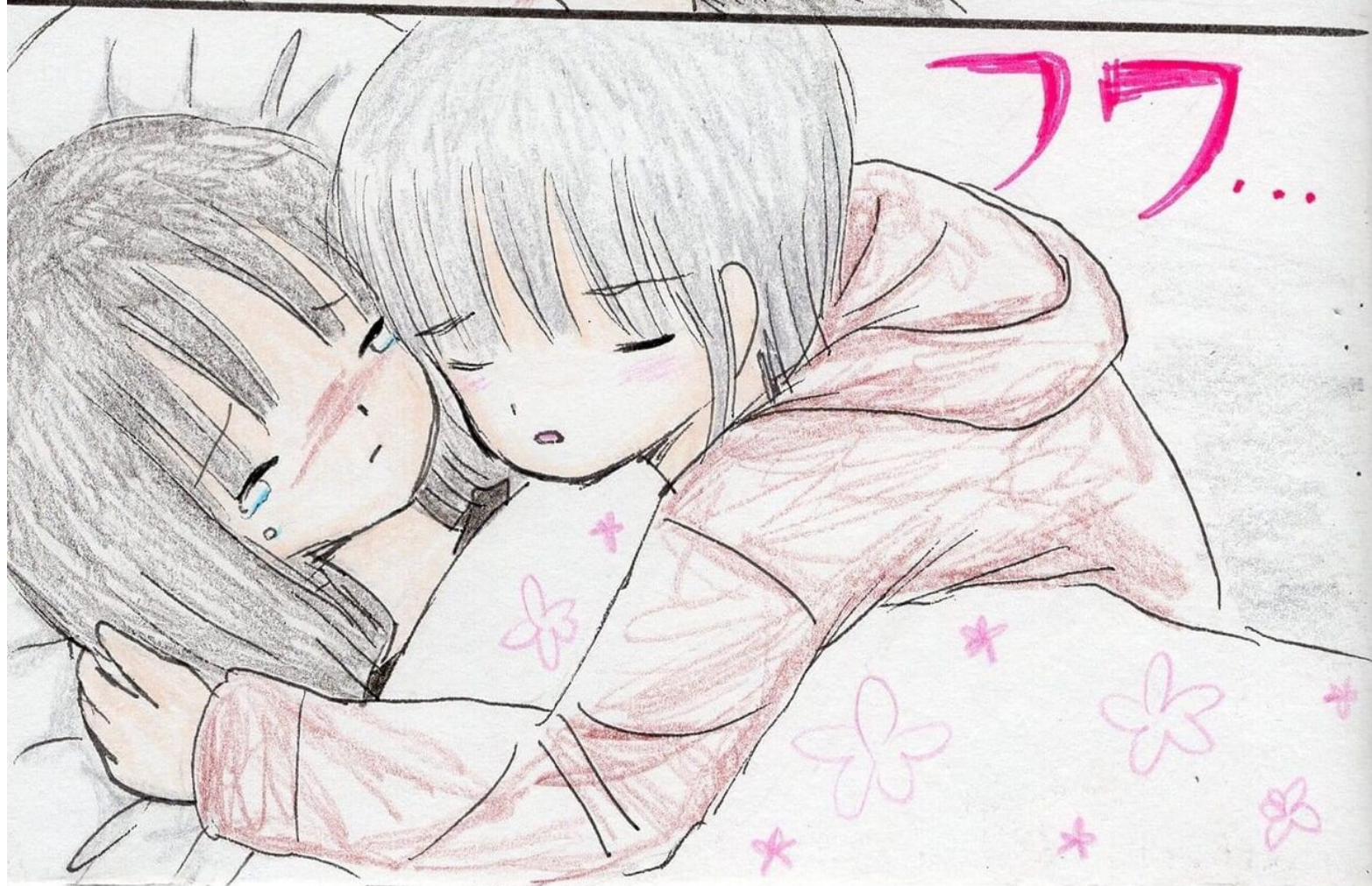
帰ってよ!



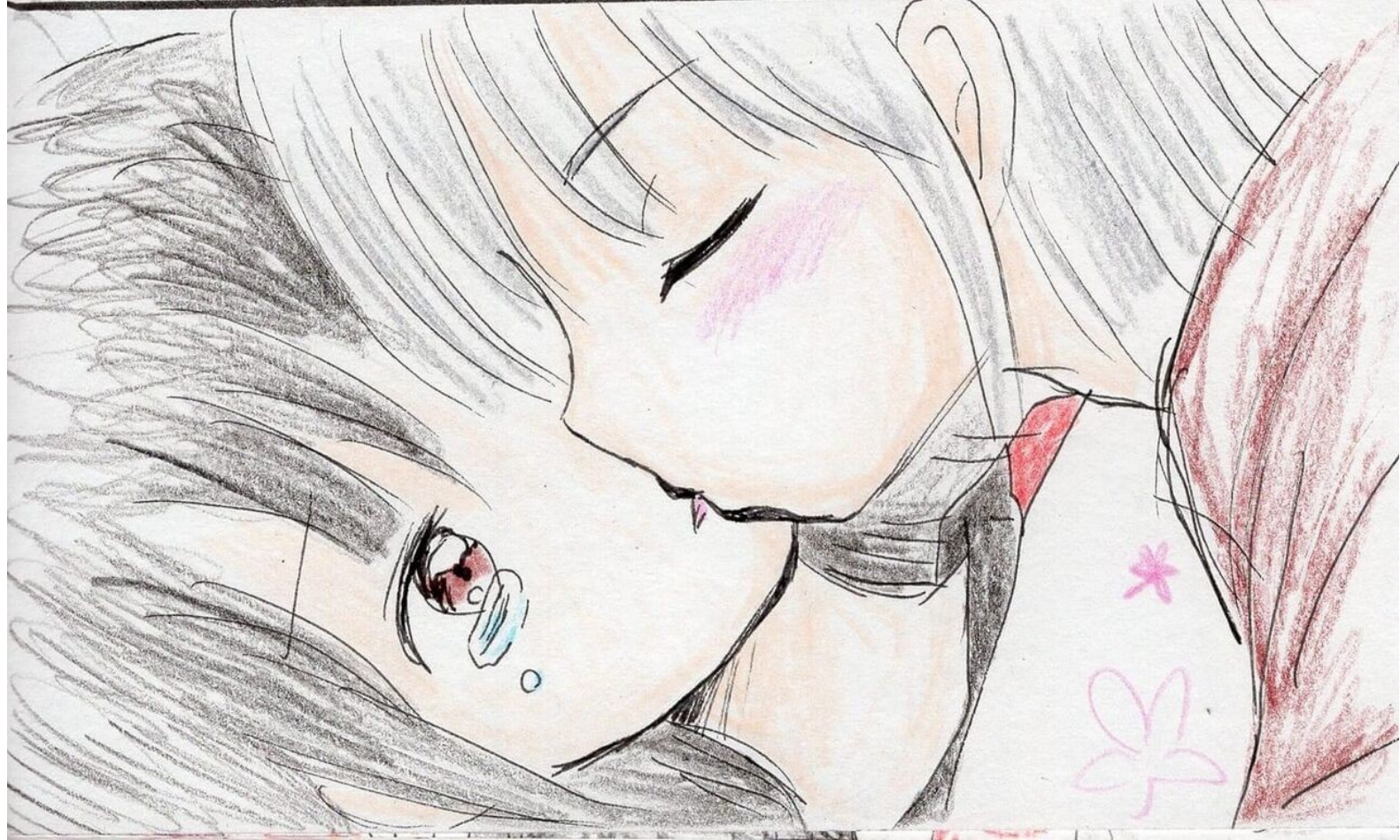
亜美を放って  
おけないよ もう  
いじめたりしない  
これからは守るから  
泣かないで...



嫌...  
怖い...

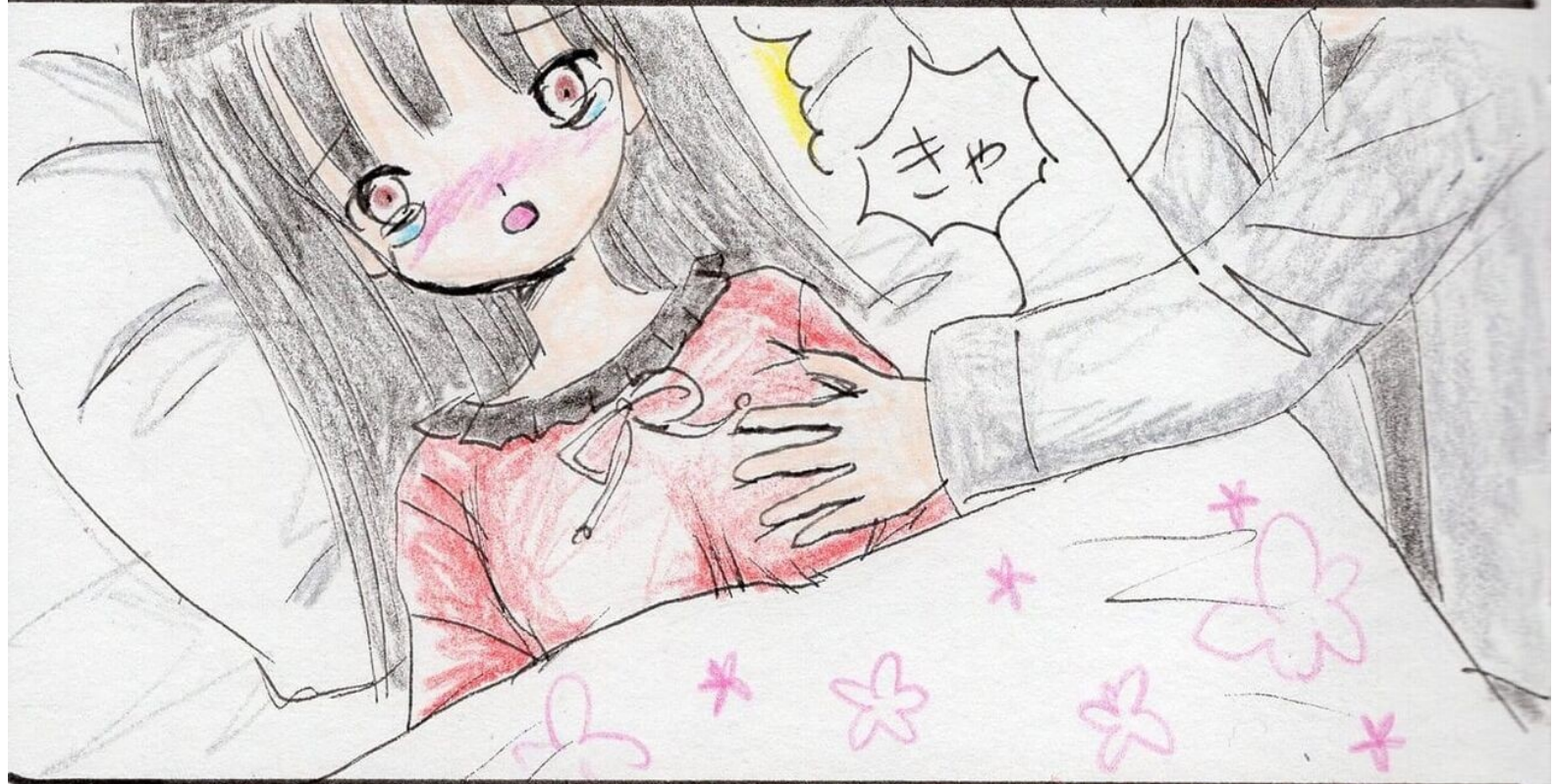


フフ...

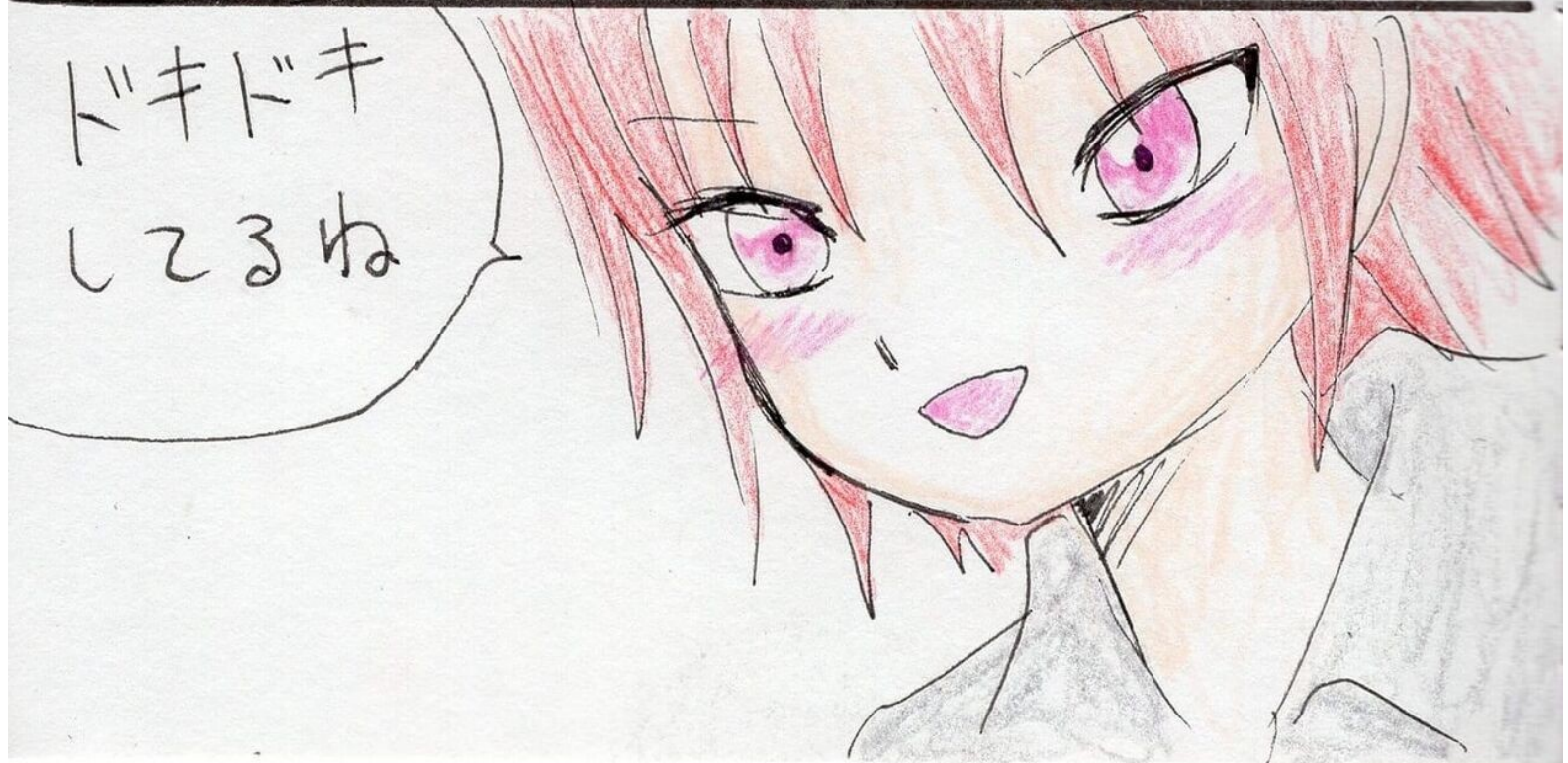


は...んて...

ドキ



ドキドキ  
してるね

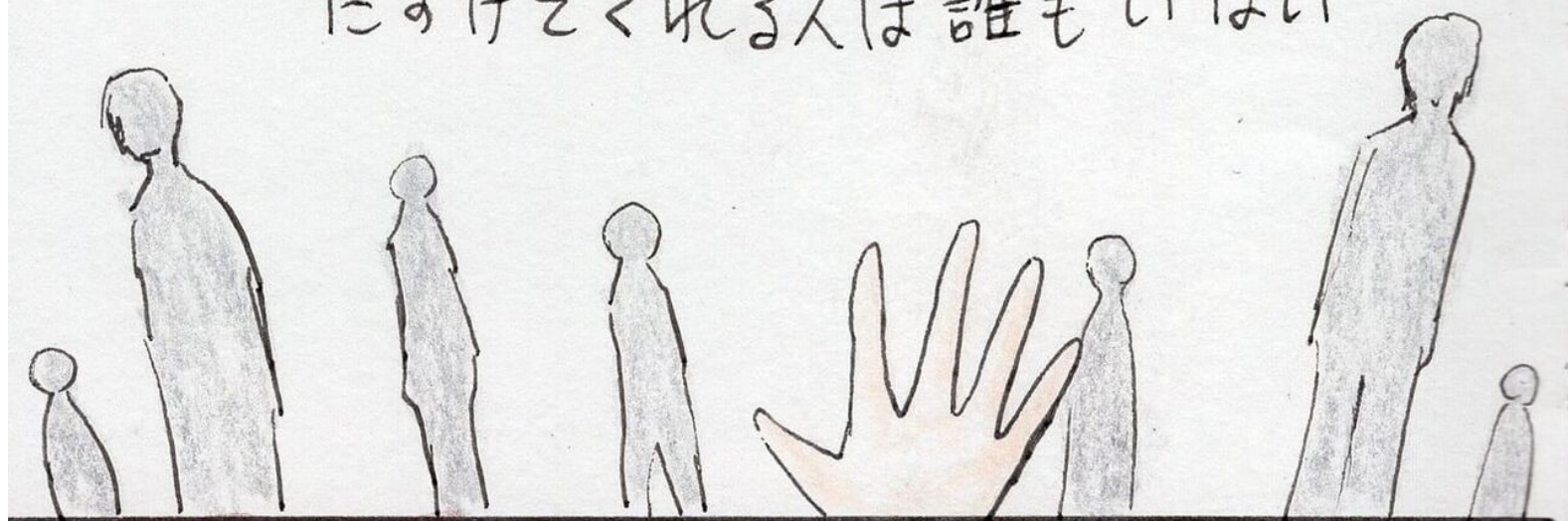




いつも... そうだった...



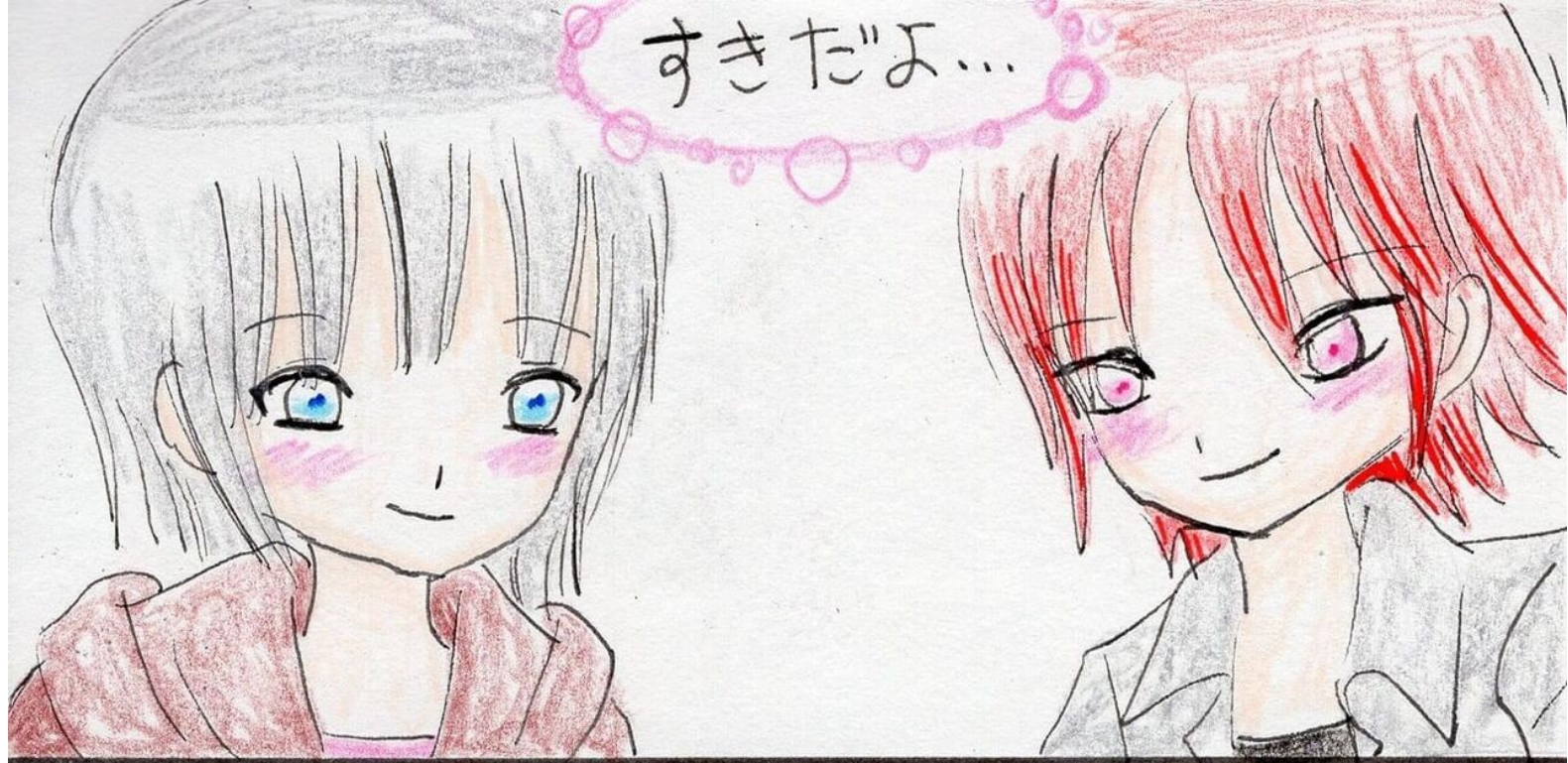
私がいじめられるとき  
たすけてくれる人は誰もいない



くあん

う...

う...



隼はその日 夕食を  
作ってくれた



ごはんできたよ  
食べな



あまり  
食欲ないな...





次の日2人は  
仕事にいくと  
言いだかけて  
いった

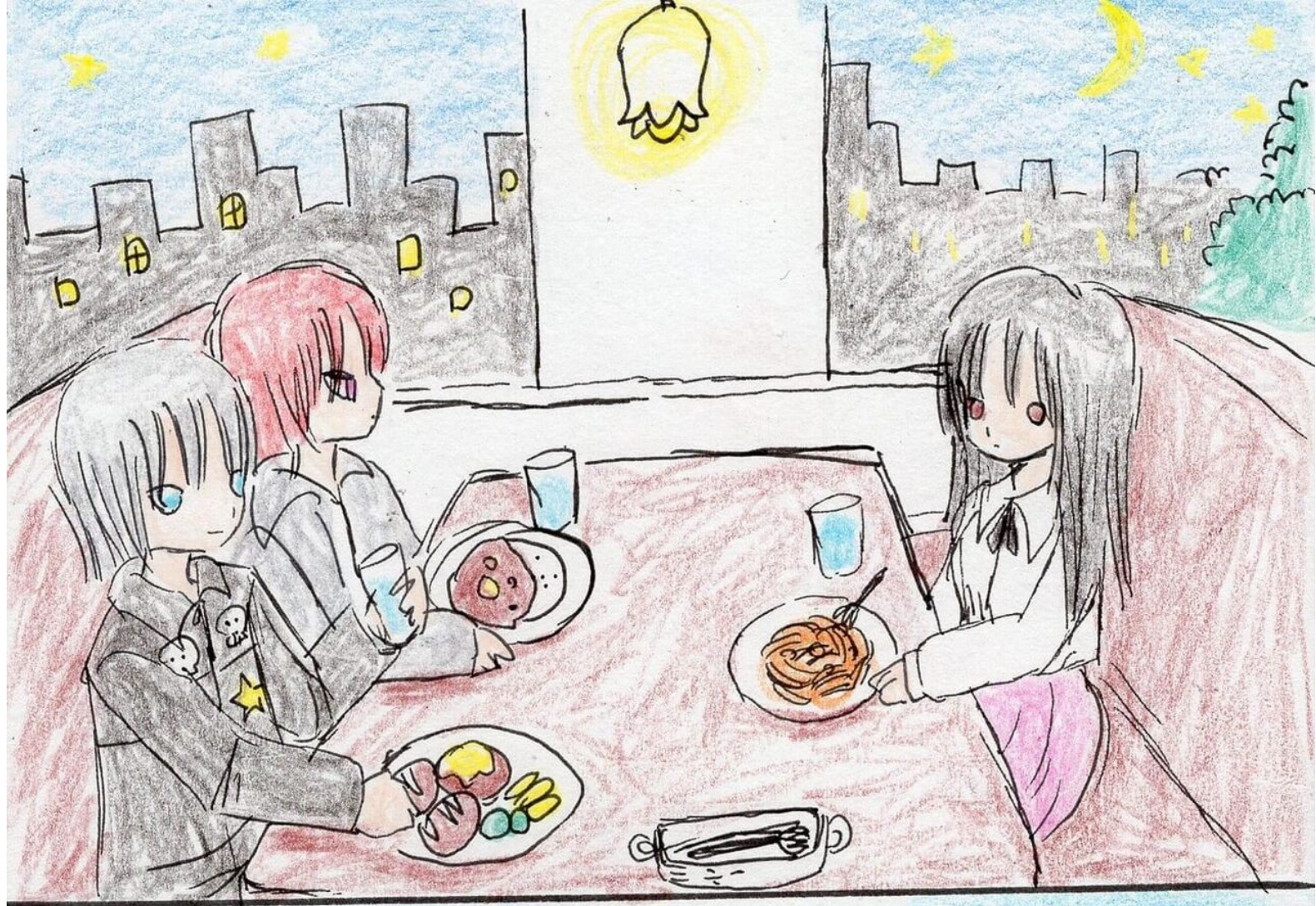


夜には帰ってきた  
また3人で  
すごした



休みの日には色々な所へ  
つれていってくれた





2人はいつもやさしかった



そばにいってくれるのは2人しかいない

楽しい...

そう思いはじめ  
ていた



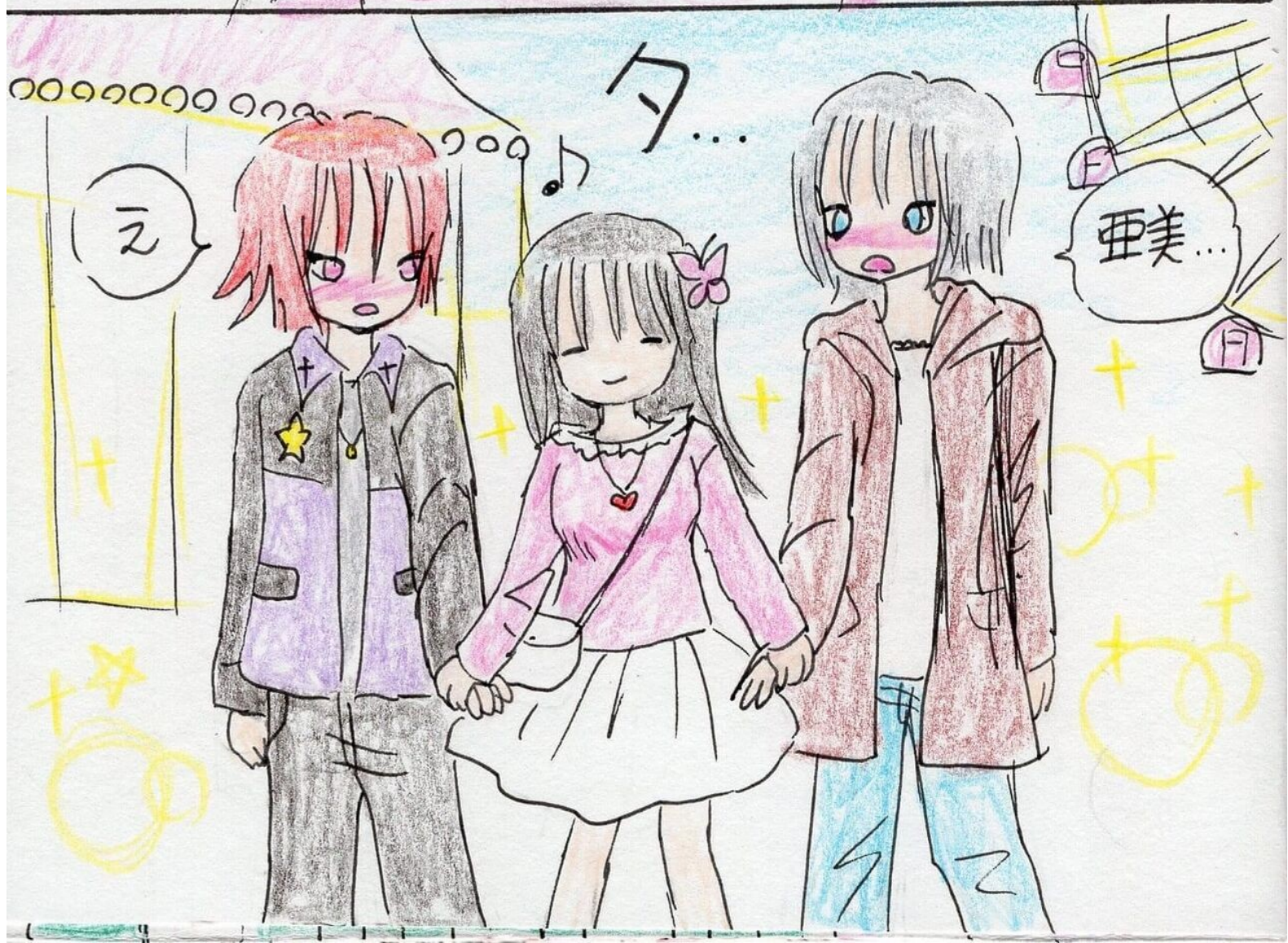
隼と敦は私のことが好きだと言った  
亜美にはだんだんと伝わってきた



私のことが好きだった...



ありがとう... 隼... 敦...  
私... 2人が好き!

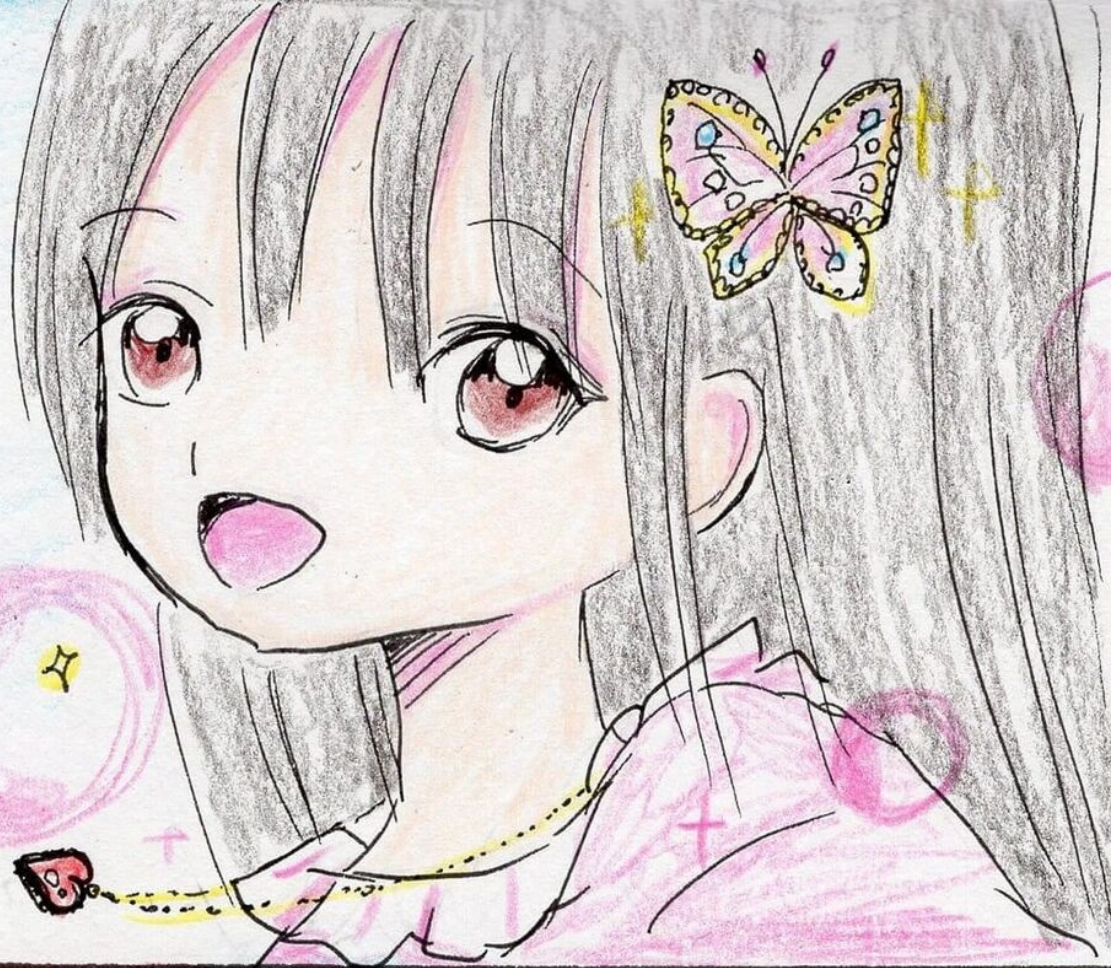


夕...

亜美...

え

次はあち  
いこー♪



笑った  
顔の方が  
カワイイ...



おしまい